

平成 28 年度献血推進協議会 会議録

1 日時

平成28年12月26日(月) 午後3時～午後4時30分

2 場所

サンセール盛岡 鳳凰の間

3 出席者

(1) 委員

望月 泉 会長、岩澤 健二 副会長、諏訪部 章 委員、石川 育成 委員
(宇部 眞一 委員代理)、宮手 義和 委員、佐々木 和延 委員、
中居 賢司 委員、熊谷 敏裕 委員、三浦 清 委員(八幡 博文 委員代理)、
菅原 和彦 委員、高橋 秀幸 委員、梶田 佐知子 委員、松本 利巧 委員、
中島 勝志 委員、長生 正広 委員、宮川 康一 委員、梶 恒一郎 委員
(猪本 吉成 委員代理)、八重樫 幸治 委員(佐々木 辰也 委員代理)、
高橋 嘉行 委員(渡辺 謙一 委員代理)
(欠席委員：鈴木 健二 委員、橋本 良隆 委員、本田 敏秋 委員、
青木 幸保 委員、荻原 禮子 委員、松田 恵美子 委員、
菅原 情子 委員、吉田 一弘 委員、関 英祐 委員、
藤原 銀司 委員、梶 恒一郎 委員、風早 正毅 委員)

(2) 事務局

保健福祉部健康国保課総括課長 藤原 寿之、薬務担当課長 新沼 司、岩手県赤
十字血液センター事業部長 鈴木 洋一、献血推進課長 菊池 望 ほか説明職員
等

4 開会

事務局から開会を宣言した。

5 あいさつ(佐々木保健福祉部長)

6 会長、副会長選出

委員の互選により、会長に望月 泉 委員が選出された。

また、会長の指名により、副会長に岩澤 健二 委員が選出された。

7 議題

(1) 報告

平成28年度の献血事業の概況について

[質疑応答、意見]

Q1 (委員)

新しい委員もいることから、400mL献血推進の理由を再度説明いただきたい。

A1-1 (事務局)

他人の臓器が自分の中に入ることから輸血は臓器移植の一種であり、輸血による副作用は少なからずある。例えば、800mLの輸血が必要な場合、400mL献血であれば2人分の輸血で済むところ、200mL献血由来であれば、4人分の臓器（血液）が入ってくることから、少しでもそのリスクを少なくしたいということが大きな理由である。また、医療機関において、輸血前の血液検査の手に係る理由もある。

A1-2 (委員)

輸血の副作用には、抗体抗原反応及び感染症のリスクがある。400mL 献血であれば、そのリスクが半分となる。

医療機関では、クロスマッチ試験を行うが、200mL 献血と 400mL 献血では倍違ってくるし、何より輸血を受ける患者さんのリスクが少しでも下がってほしいという理由がある。

400mL献血のニーズが95%であることから、このような推進となっている。

Q2 (委員)

E型肝炎のリスクについて、北海道では検査をしているようだが、岩手県ではどのようなになっているのか。

A2 (委員)

岩手県では、肝炎の発症が非常に少ないことから現時点では行っていないが、これからより実情が明らかとなれば、血液センターでスクリーニングを取り入れたい。E型肝炎のリスクのある食べ物は、猪、鹿、豚の生肉であることから、極力それらを生で食べないことを、委員の皆様に情報として持ち帰っていただきたい。

[その他]

(委員)

資料の数字の切れについての指摘。

(2) 協議

ア 平成29年度献血目標について

イ 平成29年度献血推進計画について

[質疑応答]

Q1 (委員)

献血目標人員で、血小板が前年度と比べかなり大幅にブロックから供給を受けるようだが、これは成分献血を行う場所が県内で1か所しかないことが関係あるのか。

A1 (事務局)

それもひとつの理由であるが、来年度の血小板献血の8,016人は、高単位の成分献血の割合が多い。人数的には少ないが、中身は非常に濃い計画となっている。

Q2 (委員)

血小板成分献血は、通常10単位というのを20単位取れる高単位の成分献血が多いということか。

A2 (事務局)

現在20単位は21.8%程度の割合となっており、この割合が年々増加している。

Q3 (委員)

血小板の1,330人はブロックからの受入れということか。

A3 (事務局)

そのとおり。これについては、高単位ではない支援である。

Q4 (委員)

クリスマス献血が12月、バレンタイン献血が2月ということで、冬季は輸血用血液製剤が不足しがちということか。

A4 (事務局)

会社、官公庁、学校の休暇、インフルエンザ、風邪をひく人の割合が大きくなってくる。過去冬期間は厳しい状況であった。他県でも同様の状況であるから、他県からの応援も見込めない状況である。

ただ、最近、イベント献血について、各種報道機関でのPR、各奉仕団の協力をいただきながら行っている。今年12月は、他県では非常に厳しい状況の中、岩手県では、沢山の献血をいただいている。

Q5 (委員)

献血の量が増えている県は東北ブロックではどこか。

A5 (事務局)

人口の多い宮城、福島は増えている。今までは自給自足が原則であったが、ブロック単位の考え方より、東北で必要な血液を各県ごとの生産年齢人口割合を加味した値で目標が定められている。宮城は非常に生産年齢割合が多いため、目標が増、岩手県も自給自足よりも少し目標が増となっている。福島、秋田は生産年齢人口が自給自足

で必要な割合と比べ高くないため、目標は少し低くなっている。

Q6-1 (委員)

若年層献血において、400mLの年齢制限を引き下げることが可能か。

A6 (事務局)

国の基準である。

Q6-2 (委員)

国の基準であれば岩手県だけで基準を変えることは難しいが、機会があれば国に意見を上げていただきたい。

Q7 (委員)

若年層を対象とした普及啓発について、若年層の献血率が減っているのが気になる。また、大学生の普及啓発として、大学の方々にも入っていただき、大学の協力を得ることも必要だと思う。

A7 (事務局)

若年層について、国の資料によると、全国的な統計であるが、16～19歳の人口のうち、4.4%と全国の4.3%と比べそれほど低くない。一方、本日配布の年報の6Pに、23年度からの年齢別の献血者数が記載されているが、16歳から39歳の割合が24年度までは5割を超えていたものの、25年度以降は、16歳から39歳の割合が減少していることから、注意して取り組んでいきたい。大学関係者に委員に加わっていただくことは、事務局として検討したい。

Q8 (委員)

高校生、特に女子では400mLはなかなか難しいと思うが、本人が400mL献血を希望していても無理な場合は200mL献血をお願いするのか。それとも400mL献血しか行わないのか。

A8 (事務局)

高等学校献血については、400mL献血可の年齢、体重の方に協力をお願いするが、初回者や血圧、血管の状態等を考慮し200mL献血をお願いする場合もある。

[その他]

(委員)

14Pの血液製剤使用適正化の普及について、“岩手医科大学医学部学生への血液製剤の資料を配布”との記載があるが、ここにぜひ研修医を入れていただきたい。研修医に対しても資料を配布等して適正使用を啓発していただきたい。

(委員長)

御異議がないようなので、平成29年度献血目標及び平成29年度岩手県献血推進計画については、一部修正のうえ、事務局案のとおり承認する。

8 閉会